

平成19年度公文書館実務担当者研究会議に参加して

柳沢 芙美子
福井県文書館

実務担当者研究会議では、これまでさまざまなテーマが取り上げられてきていますが、今回の会議は、はじめて資料の保存・管理と修復技法に焦点をあてたものでした。

参加申込みをした当初の私の思いは、この機会に資料保存と管理の理論や基本的な技法を見聞きてこよう、いってみれば文書館職員としての「教養講座」に参加するというものでした。このため、保存・管理の理論はまだしも、修復技法については、知っていてもいい知識ではあっても、日常的に使うことは少ない技術として、やや距離をおいた姿勢があったように思います。

30名を超えた参加者の名簿をみても、自治体レベルの機関では、修復業務の専任者を置けない条件はどこも似通っていますので、修復技術に対するこの「距離感」は、会議の参加者の中で少なからず共通するものといっていいいかもしれません。これに加えて福井県文書館の場合は、古文書資料については原則として複製資料で閲覧に供することになっていますので、閲覧利用のための補修の必要がほとんどないという特別な事情が重なっていました。

講義と実習から構成された2日間の研究会議を通して、当初のこの「距離感」がいい意味で揺さぶられることがありましたので、ここで感想としてまとめてみたいと思います。

資料保存の理念については、これまでも開館前からそしてその後の研修のなかで、何度か伺ってきたはずなのですが、まったく受講者側の要因で受け取り方が違ってくるように思われました。たとえば、青木睦氏の「アーカイブズ保存の理論」では、まず資料保存の鍵概念として「大量保存

Mass Conservation」と「段階的保存 Phased Preservation」が確認されました。「大量で多様な素材を対象に」「全体調査の上で史料状態をデータ化し、保存措置と処置の方法と優先順位を決定し、保存プログラムを作成し、計画を立案した上で、段階的に予防的措置を行う」というものです。

「解決策を出すのは担当者だ」「一般論ではなく、多様な選択肢がある」という講義の中から、ちょうど当館が開館して5年目という節目の時期にあっていたこともあり、「これをやろう」という課題として受け取れたことがありました。

その一つに冬場の書庫環境の見直しがあります。青木睦氏が紹介された史料館の劣化度調査の事例、稲葉政満氏が紹介された劣化図書の高比率が高いエール大学の事例は、冬期の暖房が資料を早く劣化させることを示していました。このことは、当館の資料保存研修会でも金山正子氏も指摘してくださっていて、一昨年から一部試行しています。年間を通して非常にカビが発生しやすい多湿な北陸の環境下ですが、書庫暖房について注意深く完全停止の方向で検討する必要性を感じました。

また、徐々に増えてきた寄贈・寄託資料群を収納する貴重書庫をはじめとした書庫排架図を作成しておくことは、書庫管理や災害対策のためにも役に立つと思いました。

さらに、細やかな下準備のもと、少人数編成で行なわれた実習では、修復の専任担当者がいない当館でも取り入れることができる技術が盛りだくさんでした。

たとえば、簿冊のクリーニングの際には、ほこりの中に入れられないために、天・地・小口はしっかり押さえて刷毛を使うこと。撮影の下準備として

も必要になる「しわのばし」では、伸びにくいしわに筆で水分をさす際（事前に文字が滲む素材で書かれていないか要確認）も、低温でアイロンを使う際も裏から行うこと。水を指し過ぎないように筆をしごいてから使うこと。アイロンは裏側がステンレスのものがいい。



また、取れかかった題箋・付箋の「糊差し」や小さな痛みを補修する「繕い」で使われる正穀糊は、少量なら電子レンジでも作れること。糊を付ける場合には、表側に糊を回さないために、刷毛や筆は必ず内から外へ動かすこと。定着させるためには不織布をあてて、骨へらでこする。アイロンを使う場合にはオープンペーパーが役立つ。

さらに和紙を濡らして引き裂いてつくる「くいさき」は、以前に受けた研修でも教えてもらったのですが、和紙の虫食いでなく、劣化がすすんだ酸性紙の公文書の補強や折れ切れ、切れてしまった閉じ穴の補強にも活用できるのは、なるほどと思いました。毛羽だった繊維が絡んでくつきやすいので、中心部分は薄い糊で、また毛羽の部分はほとんど糊をおとした筆でなでてやるだけでいいとのことでした。

水に拡散させた和紙の繊維を資料の欠損部に流し込んで、補填するリーフ・キャストイングも和紙の性質をよく利用した修復方法と思いますが、紙を湿らせて繊維の結合を弱くし、あえて繊維を毛羽立たせて切る「くいさき」の応用力にも感心

しました。極薄の和紙から少し厚い和紙まで「くいさき」のテープを予め作っておくと重宝なこと。ただ表裏とともに和紙には簀の目とそれに直角になる繊維の縦目があり、これらが本紙と同じ方向になるようにとのことでした。

このほかには、糸綴じ（四つ目綴じ）や裏打ち、洋装本の修復、パンフレットの製本などを行いました。大量保存という文書館施設の現状をよく把握し、不織布や極薄の和紙を活用してそれほど熟練していなくてもできるように改良された技法が紹介されました。資料群の中に和書・書籍が含まれている場合には、あわせて受け入れている当館にとっては、和装本の綴じの補修も活用できる技法のひとつでした。

また公文書に大量に含まれるクリップの取り外しについては、クリアフィルム（透明のフィルム）を紙の両側から入れてやると外れやすいこと。ステープラーはマイナスのドライバーで起こす。粘着剤が劣化したテープの跡は、色を落とすのには溶剤を使わねばならず少なからず紙を痛めることになるので、色を落とす必要がなければ和紙で補強するのみでよいのではないかと意見にも納得がきました。

いずれも、少し専門的に修復を学ばれた方には自明の事柄かもしれませんが、それを丁寧に取り出して明示してくださった実習でした。これは教養にしておくのはもったいない、日々の資料整理や資料管理のなかで実践していなくては、と思える具体的な軽修復の技法と情報であったと思います。

「大量保存」と「段階的保存」のための文書館施設の修復技法という視点を貫いて、今後もこうした研修の機会をつくっていただけるとたいへんありがたいです。有友さんをはじめとした修復室の方々、本当にありがとうございました。

柳沢芙美子（やなぎさわ ふみこ）：福井県文書館主任。平成15年2月から福井県文書館に勤務。